

反障害通信

12. 1. 29

32号

反差別を全ての運動の基底に据えるために

最近、いろんな運動を見ていると、自分たちの直接の活動の枠内での活動にとどまってい、「個別」の運動が「個別」の枠内でとどまり、その広がりがとらえられないという現象にたびたび出くわせます。そして、その「個別」の運動もその問題がどのようなこととしてあるのかということがとらえられないまま、その解決の道筋をどう方向付けて運動していくのか、そもそも自分たちが何をしようとしているのかも、明らかにされないままに活動しているという状況が広がっています。

わたしは運動を「問題解決のための活動」と規定しています。解決するためには、その問題がいかなる問題なのかをとらえかえさねばなりません。そして、長期的方針を立て、その中で今、何をなすべきかという具体的課題と目標を設定し、その活動を点検していく作業が必要です。そのオーソドックスな活動ということが、成立しなくなっています。

そもそもその問題がどういう問題なのかということをとらえ返していく作業がない、議論も成立しない中で、いきなり問題を表層的にとらえて、どう解決するかというところで動いていく、またそもそも解決すること自体を目的にしているのか疑問に思える活動さえ出てきています。要するに、何かやっていることに自己満足していく、自己表現的活動に収束してしまいます。誤解のないように書いておきますが、自己表現的活動そのものを否定しているわけではありません。芸術とか文化的活動としての自己表現活動は大いに賞賛されることですし、むしろ芸術のみならず、みんなが自己表現的活動に生き甲斐を見いだせるような状況を生み出していくことが必要ではないかと思います。

わたしが問題にしているのは、運動が自己表現的に活動にすり替わることです。もちろん運動が同時に自己表現活動でもあるということは否定することではないのですが、運動の論理が成立しなくなる、自己表現的活動を問題にしているのです。

このような事態になっているのは、なってきたのは、運動の展望がみいだせなくなって、「個別の問題」を「個別の問題」の枠内で解決しようとしつつ、そこでも展望が出なくなっている中で、とにかく何かやっていくというような活動になっていることがあるのだと思います。

そのようなことも含めて、問題をきちんととらえ返す作業が必要です。

そして、そのとらえ返しの作業に、差別ということ 키워ドとして読み解いていくことが、問題を「個別」の枠内でとどめないで総合的にとらえ返すのに必要だとわたしは考えています。

そのことは、以下に論じていきます。なかなか他者にちゃんと届く文が書けないのです

が、読者のみなさんの批判や意見を仰ぎながら書き進めたいと思っています。

さて、わたしは今日の課題を大きく三つの課題としてとらえています。貧富・階級・労働問題、一般的に言われる「差別の問題」、エコロジー問題です。

三つの課題と書きましたが、それらは切り離されたことではなく、むすびついていることです。それらのことを差別というところからとらえ返してみたいと思います。

労働を巡る差別の問題

まずは貧富の問題・階級の問題・労働問題ということにおける差別の問題です。

70年代の後半に労働運動で「弱者救済国民春闘」というスローガンが出てきました。

そのことは、曲がりなりにも戦闘性を持ち、他の社会問題との連帯の志向のあった労働運動の転換点を示していたのです。わたしは、そのスローガンを見たときに主流の労働運動の戦闘性の解体をはっきりと意識しました。そもそも労働者も弱者だったはずです。「先進国」の本工労働者がそれなりの既得権を得る中で「労働貴族」として、差別する側として、立ち現れていったことなのだと思います。「弱者」といわれているひとたちのことを他人事の問題にして、救済の対象にしてしまったのです。

さて、次次項のエコロジー問題にもつながる話を書いておきます。かつては電力労組の中でも、中国電力の反原発闘争があったのです。今日、電力会社の労組は労使協調路線に取り込まれ、労組が原発の復活・維持に動いて、連合とつながっている政権与野民主党に働きかける事態に陥っています。原発の働く労働者の使い捨て、都市—中央の地方への危険の押しつけ、・・・原発関係の交付金が地方財政に麻薬漬けのような状況を生み出していくこと、ウラン鉱での被曝などなど、差別の中で成立している産業を維持しようとしている労組、個別利害を追い求める「社会性の喪失」が、ここまで来ているのかという思いを抱いています。

さて、差別の問題をいろいろ考えていくとき、その出発点にマルクスがあるとわたしは押さえています。しかし、そのマルクスがいろいろな今日「個別差別」としてとらえられることをとらえきれなかったという問題もあります。そして、マルクスが軸として据えた、労働問題においても、今日的には「非正規雇用」ととらえられる労働者を「ルンペンプロレタリアート」と規定したという差別の問題があります。これは当時非正規雇用のひとたちの動きが革命をつぶしたというところでの、マルクスの怒りの矛先が向いたのですが、今日的にはむしろ、多くの正規雇用労働者は労使協調というところに取り込まれ、自分たちの利害の追求、既得権の獲得擁護というところに走ってしまう傾向が出ています。

そこで、むしろ、労働運動は非正規雇用や失業者という人たちの中に見い出せる状況も出ています。プロレタリアートという語が意味をもつのはむしろ非正規雇用労働者においてあるのではないかと。

そもそも労働運動の衰退は本工主義というところに陥った、労働運動が自分たちの權益を護るというところに陥り、労使協調路線に陥って至った、そこで、臨時工などを切り捨てる、他の差別の問題を切り捨てるに至ったという問題なのです。いったい労働者間の差別を切り捨てたら、労働運動はどうなるのか、その悲惨な状況が今日の労働運動として現

れていることなのです。それは労働能力というところでの賃金格差というところでの分断に乗った、そこでの反差別ということでの労働者の連帯の道筋を消してしまったということが第一の問題です。そもそもマルクスの曲解としての労働価値説という錯誤の問題もそれに拍車をかけたのです。そもそも労働問題自体が、ひとの生きる営為の中で労働と言うことを優先させること、しかも労働崇拜的なところで労働力の価値というところでひとを価値付けしていく、そのこと自体が差別の問題だという観点を欠落しているのです。そのことをとらえ返さない限り、労働運動の再生はありえません。

「障害者運動」がすでに70年代に「労働は悪だ」とか、「(介助を受けるとき「障害者」が)腰を上げるのも労働だ」とかいう提起をしていたことが届かなかつた、未整理な提起にとどまっていたという問題からもとらえ返すことができます。

一般的に言われる「差別の問題」

さて、一般に差別というと、障害差別、性差別、人種・民族差別、身分差別・・・と「個別」差別としてとらえられます。あれかこれかという差別のとらえ方です。そして、「差別ということでは一般化して語ってはいけない」というひとさえいました。そういうとらえ方をするとき、「差異があるから差別がおきる、その差異はマチマチだ」というとらえかたになっているのではないのでしょうか？

このことから批判をしていく必要があります。それに関しては、わたしが認識論的なところからのとらえ返しの作業をしてきました。で、むずかしいと批判され続けていることで、とりあえずはさておきます。ここでは、「自然的差異」があるから差別は自然的に起きることではない、「差別の構造」の中で、「差異」ということが浮かびあがってくるという事態をとらえられること、という指摘をしておきます。そこから、個別的に起きてくるととらえられる差別、障害差別、性差別、人種・民族差別、「身分」差別、都市の地域・農村への差別、学歴差別、・・・ということなどを「差別の構造」(関係性総体としての差別)というところから演繹していく筋道がとらえられるのです。

実は、このようなとらえ方は、すでに出ています。1970年代に出ていた全障連の「障害者とは障害者差別を受けるものである」という規定や、90年代に日本に届いてきたイギリス発の「障害の社会モデル」の「障害とは社会が「障害者」と規定するひとたちに作った障壁(と抑圧)である」(括弧内はわたしの書き加え)のとらえかたとらえ方です。そのようなことはフェミニズムにおいてはポスト構造主義フェミニズムという流れの中で、性差とは何かという議論で、性差ということ自体から脱構築するという議論も出ていますし、部落差別においても、出身階級や職業などから作られるというより、そこに住んでいるからというところで差別される構図が示されています。差別される何か「実体」のようなことがあるのでなく、差別される事項が構築されているというような差別です。

そのような「差別の構造」(関係性総体としての差別)のようなことをとらえ返して、そこから、もう一度ひとつひとつの差別をとらえ返していく作業が必要なのです。

ところが、往々にして、差別ということ自分を抱える被差別、そして自分が直接対象にしている差別に限定してしまっていることが出てきます。

分かりやすい例をとりあげます。わたしは永田町の代議員制的な政治の批判をしていま

すが、もっとも一般的にとらえやすいので、例としてあげてみます。個別差別の問題でその代表的に国会議員になったひとは、自分の被差別、自分が関わってきた差別の問題をほりさげることによって、政治総体を論じることができるようになることなのですが、自分の課題の差別に限定されて、他の問題を差別ということからとらえ返す作業ができないままにいるという事態が往々にしてあります。というより、そこから抜け出したひとをわたしは知りません。そして、自分の課題の差別ということでは一応反差別というところで動いていたとしても、他の差別の問題では差別に加担するような動き方さえしていて、唾然とさせられること多々です。こういう場合、「自分の課題の差別ということでは一応反差別というところで動いていた」と書きましたが、ほんとうに反差別という立場に立ち得ているかという、いろいろ疑問も出てくることです。これは、わたしが一番の課題にしてきた障害差別の問題でいえば、日本の「障害者運動」はいま「障害者権利条約」を国内法の整備とともに批准する、そして「障害者差別禁止法」を制定するということを軸にして動いています。ところが、その「権利条約」自体に、わたしは疑問を感じています。「権利条約」のキーワードは合理的配慮」ということです。

「合理的配慮」ということはいったいなんなのでしょう、60年代後半の教育学園闘争で、当時の大学再編を「近代合理主義に基づく教育の帝国主義的再編」と押さえて批判していましたし、労働運動の戦闘性は反合理化闘争として突き出されてきました。そのようなところからとらえると、「合理的」ということばがどのような意味をもつかがとらえられるはずです。むしろ、前項にあげた労働運動の中で、「弱者救済」などというスローガンをあげられてきたのは自らが反合理化闘争をひっこめたところからきているからではないかと押さえられます。そもそも「障害者」の多くは、一部エリート「障害者」をのぞいて、「合理性」という名の下に、労働市場から排斥されてきたのではないのでしょうか？

そもそも障害差別はどこから来ているのかというのとらえかえしがないのです。その差別の土台に労働力の価値を巡る差別があるとおさえられるのではないのでしょうか？

この土台ということばマルクスの唯物史観の観点から出てくる言葉です。

ところで、マルクス葬送ということが出て、唯物史観批判も出てきています。

その唯物史観の押さえ方自体がどうもおかしいのです。

たとえば、フェミニズムの議論の中で、ケア労働で無償で働くことによって、価格破壊が起き、ケア労働の価値を低めるという話をするひとが出てきています。そのひとは上野千鶴子さんです。上野さんはマルクス主義フェミニズムを日本へ紹介したひとですが、そのマルクス主義フェミニズムの押さえ方がおかしいのです。シャドーワーク論や家事労働概念がマルクス主義フェミニズムにあるのですが、マルクスは資本主義社会では家事や生活が労働力の生産・再生産過程と物象化された形で現れると知っているのであって、そのことを批判しているのです。ところが上野さんにはその批判がないのです。このひとは、マルクスが教条化されたマルクスの思想を批判する意味もこめてか、「わたしはマルクス主義者ではない」と言っています。しかし、そもそもマルクスが何を言わんとしているのかを理解しているとは思えないのです（上野さんはポスト構造主義の紹介者でもあるのですが、そのキーワードの「脱構築」ということばでいえば、「労働概念の脱構築」という思いには至らなかったのでしょうか）。マルクスの唯物史観のとらえ返しが必要なのです。そこで

は、流れ的には他の哲学・思想から出てきたサルトルやデリダが「マルクスの思想は現代社会では乗り越え不可能な思想である」という命題は生きているはずです。

そして、労働ということに留意することによって、労働問題自体も差別の問題であるというとらえ返しの中で、そして他の差別から労働ということをとらえ返すことによって、差別ということをキーワードにして読み解くことによって、あらゆる問題がとらえ返せてくるのではないのでしょうか？

そして、運動の分断を超えて広がりや深化を勝ち取るためにも、運動を運動として動かしていくためにもそのことは必要なのです。

エコロジー

さて、「もうひとつ」の問題、エコロジー問題を取りあげます。

実は3月の原発震災の以前において、わたしにとって、エコロジーはひとは生きる環境を破壊していきられないということは自明の論理だから、この資本主義社会においても解決の動きは出て来ると押さえていましたし、温暖化対策など少しは問題にされてきました。ただ、その自明な論理が、「資本の論理」の飽くなき利潤の追求の前にどこまで働くか、という思いがありました。原発などに見られるその危険性の自明な論理さえつぶしてきたことや、人々が自明なことに気付く前に、取り返しのつかない事態に成ることを畏れていました。いつも後追いの対処で、もうすでに遅すぎたという事態がくるのではという恐れを抱いていました。わたしはむしろ資本主義社会をほうむりさることによって、環境問題を解決していく道筋のようなことを考えていました。

しかし、やはりそもそもこのエコロジーの自明の論理さえ通じないということの問題に底に何があるのかを、今回考え始めていました。

で、エコロジー関係の本を読んでいる中で高木さんのエコロジーに反差別の思想を織り込んだ論攷に出会いました。原発問題、エコロジー問題にリンクする差別の問題としてとらえてきてしまっていたのですが、そもそもエコロジーにおける差別そのものの問題がとらえていなかったことが、エコロジー関係の学習の中で出てきました。そのことは「反障害通信 28号」の「反差別コミュニズム論序説の序—反差別と階級闘争とエコロジー—」の中で少し展開しました。

エコロジーそのものにおける差別の問題をとらえ返す事は、ひとのひとに対する共時的差別だけに収束する事に陥る「一般に言う差別問題」に新たな観点を導き出せるのです。エネルギー資源を含む資源の未来世代からの収奪、そして占有という差別、また生きる環境の収奪という差別の観点がエコロジーそのものの差別ということで鮮明になっていくのです。

そればかりではありません。環境破壊を生み出す科学というところの、科学主義、専門性などによる知の抑圧の問題もあります。

さてエコロジーの運動というと、とりわけ、エコロジーというところだけの一致ということでの広がりや強みがあると同時に、それが時として運動的に屈折したり、他の差別の問題で差別的になっていくことから、逆に広がりを持ち得ないし、仲間作りもすすんでいかないという弊害もありました。エコロジー問題は、高木さんがやろうとしていたように、

反差別というところから総体的にとらえていく観点が必要なのです。

そのようなところでエコロジーということの重要性和その取り組みの必要性を提起することで、わたしも遅ればせながら、その輪の中に入っていきたいと思っています。

反差別ということでのトライアングルの活動を

もう一言書き加えます。かねてから、赤と緑の連合とかいう提言がありました。今回のわたしの文の中では、最初の項と最後の項との連合ということなのですが、果たしてそれは別々の問題として連合することなのでしょうか？

わたしは、それを反差別というところから、「個別被差別項」としてあらわれてくることの根底に何があるのかということも含めた、「差別の構造」（関係性総体としての差別）というところのとらえ返しの中で、つながっているトライアングルの問題としてとらえ返しができるのではと思います。

反差別というところからすべての問題をとらえ返していく作業が必要なのです。そこから分断を越える運動の結びつきの深化と広がりを獲得できるし、あきらめから起きてくる屈折した運動から希望の運動への道筋もでてくるのではと思います。

ここに反差別という観点からのとらえ返しの提起をした次第です。

まだ、まとめ切れていません。読者の皆さんとの対話の中で、批判と提起を受ける中で、この議論を拡げ深化させていきたいと願っています。

(この論攷は『反障害原論』への補説的断章(10)として同時に位置づけます。)

(み)

読書メモ

原発震災—エコロジー関係の読書がまだ続いています。差別という観点のある小出さんの本を読みました。直接エコロジーということではないのですが、自然観というところでのベイコン哲学にコメントした佐々木さんの雑誌『思想』に載っていた論攷を読みました。そして、高木さんのずーっと探していた初期作品が載った著作集七巻を読みました。これは、マルクスが経済学に入り込んでいく前に哲学的な論考があったように、高木さんにも哲学が、そしてマルクス／エンゲルスとの対話があったのだと、刺激的な論攷でした。もっと丁寧にマルクスを挟んだ対話の必要があったのですが、「消化不良」のままのメモになりました。後で、もう一度きちんと対話したいと思っています。

これからの学習、まだエコロジー関係で広がっていった「積読」があるのですが、高木さんの対談の本を二冊読んで、文明論的などころでホピ関係の本を読んで、集中学習に一段落をつけたいと思っています。後はエコロジー関係の学習も同時並行的学習に切り替えます。そこから、ずーっと気になっていた「ポスト構造主義フェミニズム」関係の論攷を読みたいと思っています。その前に、障害学関係で出ているケア労働関係でのフェミニズムの上野さん批判への横レスのために、急遽「積ん読」している本を挟むかもしれません。

・小出裕章『放射能汚染の現実を超えて』河出書房新社 2011

この著者は反原発で動いていた著名なひとなのですが、他の反原発の論者に比して、あまり本を出していませんでした。この本は、その数少ない本で、そのリニューアル本です。

本を出すよりすることがあるというところで動いていたひとです。今回の福島原発震災の後で、引っ張り出されて、対談とか、編集者あたりのはたらきかけでやっといくつかの本を出しています。

この著者には反差別の思想・世界観があり、「まえがき」や「あとがき」でそのあたりのことを展開しています。

また、原発の問題は単に原発の問題にとどまらないという、反差別の広がりを見据えています。83P

また、自分が原発を止められなかった責任ということを展開しています。

自己責任論の問題 91P、放射能の危険性ということで線引きするのは単にガマン量ということにすぎない 117P、放射能に汚染された食物が飢餓国に輸出されるということをもっと阻止しなければならない、という差別の構造を見据えた論理 123P、日本で被害者の論理ばかり先行していることの批判も出す中で、「唯一の被爆国」と呼ぶことの誤りという指摘 130P、「自らが関わりきれない無数の課題と根源的な地平で連帯する」140P という、この「根源性」という観点の突き出し、そして、浪費こそをやめることが問題だという観点を出しています 190P。

さて、この本では、この著者が原発を阻止できなかった責任、原発のエネルギーを享受してきた責任とかで、汚染物質が飢餓国に輸出されることを阻止するために、放射能汚染物質の輸入を阻止する事に反対し、自らが食べようと言うような提起をしています。反原発を運動していたひとの間で物議を醸し出していたようです。

このあたりは、最近書かれたばかりの本を今読んでいるのですが、その中には今のところ出てきません。著者も対話の中で整理済みなことなのかも知れません。気になっているので、コメントしておきます。わたしは運動主体の責任という問題と、他の自己責任の問題を混同しているのではと思います。後者は今日のグローバルゼーションの中で、抑圧のキーワードとしてつかわれていたことです。差別されているひとがそこに追い詰められていくところでの「自己選択」は「自己決定」にはならないという問題なのです。この本の中でも、輸出規制をなくしたら、そこで汚染物質にさらされるのは日本の中の被差別者だという指摘を受けたという話を出しています 126P。わたしは、むしろ汚染物資を破棄させ、そこでなくなる食料の供給をどうするのかという問題をたてることでないかと思います。

ちょっと疑問点も書きましたが、反差別論を展開しているわたしにとって、著者の反差別論には共鳴すること多々、わかりやすく書かれている本で、テレビなどで、被害者の思いをとらえ返し、自己責任というところで涙していた著者の人柄というようなどころでも惹かれていました。

・小出裕章『原発のない世界へ』筑摩書房 2011

原発の問題を分かりやすく書いています。わたしもそれなりに情報の蓄積をしてきたので、すーっと読んで入ってきました。

いくつか目にとまったこと、新しい内容をしるしてみます。

癌へのリスク計算をわかりやすくざっくり書いてくれています。42P

また「自分事」としてとらえる観点は、わたしが今の社会に広がっている「他人事」の論理と通じることで、共鳴していました。60P

なんで、こんなおかしな原発が続いてくのか、どうしても分からない 87P、という思いは反原発の立場に立つものには共通の思いなのですが、どうして、この思いがひろがっていかないのか、著者も書いていて、わたしも分析しているのですが、それでも「なぜ」という思いの中での反原発の運動なのです。一カ所、著者が職場で教授たちと論争し、論破するときに教授たちが持ち出す論理を紹介している箇所があります。187P

どこからが危なく、どこからが安全などということは被曝量と癌などの発生率は直線的な比例関係にあり、閾値などないという指摘 155P や、六ヶ所村の再処理工場や、もんじゅ、人形峠の採掘現場などのついでの話は、他の書などではあまり書かれていず、参考になりました。

著者は世界のエネルギーの独占・不公平という差別の問題をとりあげています。169P 著者の主張は、エネルギー独占ということをやめて、とりわけ原発立地国でのエネルギー中毒からの脱出ということで表せるようです。「人類にとっての真の課題は、際限のないエネルギー供給ではなく、エネルギー中毒からいかに抜け出すかにある。」165P

著者は反差別の姿勢のあるひとで、障害問題にもふれています。171P

これについては、ちゃんととらえ返さねばならないので、別稿で書きます。

ひとりひとりの判断とか自己責任の論理は、また続いているようです。52P

筆者は反原発の運動は敗北の積み重ねだと書いています。190P

それは全ての運動に言えることで、その敗北の積み重ねの中から、何を蓄積し、どのように展望をきりひらいていくのかということだろうと思っています。

原発の再稼働の動きが出ていますし、自然エネルギーへの転換を押しつぶそうという動きも出ています。著者がどう考えてもおかしいという、再稼働・維持をつぶす運動をおこしていかなくちゃいけないと思います。もうひとつ、著者が書いている世界的な格差による差別の構造の中で、今回の事故で明らかに加害国になった日本の政府と企業が一体となって原発の輸出をなそうとしています。このようなことは許されるはずがなく、阻止の運動をと思っています。

この著はいろんな資料を駆使し、とてもわかりやすく、そして著者には反差別の思想もあり、共鳴すること多々の貴重な本だと記して置きます。

・高木仁三郎『宮澤賢治をめぐる冒険—水や光や風のエコロジー（新装版）』七つ森書館
2011(1995)

高木さんはたくさんの本を出しています。その本の中でも、高木さんの文学的指向で気になっていた本でした。原発震災の後、高木さんの本を探していたのですが、絶版になっている本が多く、この本もその一つでした。で、古本でもタッチの差で買い損ね、これは全集を買って読もうかなと思っていたら、その全集も書店の店頭で一時品切れで、やっと再度出てきたので、買おうとしたら、なんと、この本の新装版が出てきて、ラッキー、と即購入した本です。

高木さんは宮澤賢治とすごく共鳴しています。いくつかの共通項があるようです。というより、宮澤賢治を意識した高木さんが後を追ったという面もあるのです。

エコロジーや自然指向、科学指向、という共通項があります。教員をやめて羅須地人協会（賢治）と原子力資料室（高木さん）という民間のグループを作ったことが類比できません。

高木さんの詩的・文学的な側面での賢治への共鳴のようなこともあります。そのようなところは文学的な感性のないわたしにはうまく表現できません。いくつかの文やキーワードを示し、関心をもったひとに是非この本を読んでもらいたいと思います。

「宮澤賢治は、自然をこよなく愛した人であり、自然をすばらしく謳い上げた人です。・・・中略・・・それは、作品の上だけではないんです。彼は生きかたそのものの中で、非常に深いところで自然と交わっていて、それが作品に反映しているといえましょう。」6P

「彼の世界というのは、水であり、光であり、風である」7P

生きた水 17P 深層地下水の汚染 18P 賢治の水 19P 命の流れ 28P 生きる悲しみ、死ぬ悲しみ 43P 大きな水の流れ 48P

英語とドイツ語の環境という語についての説明があり、「西洋から来ている考え方で、いわば人間がいて、人間の周りに環境というのがあって、人間が生きるために環境が怪しくなってきた。だからこの環境を守らないといけない、そういう考え方が今の環境問題です。／・・・中略・・・そうではなくて、自然の大きな全体というのがあって、人間はそれに取り巻かれた一員でしかないんです。人間があつて環境があるのではない。全体があつて、その一部に、点のような存在として人間がある、そういう全体というのが賢治の書きたかった自然であると思います。／とくに賢治の書きたかった水というのは、人間全体を、生き物の世界全体、地球全体を大きく包んでくれる水だったのです。」50P・・・これは「全体」を「関係性総体」と置き換えると廣松さんの関係の一次性という論に繋がっていきます。

彼の銀河は流れであり、水の流れ 52P

「根本はその一つ一つの計画でなくて、そういう人間と自然の在りようの根本みたいな所を、もう少し変えていかないと、・・・」66P

「科学をどのようにして人間的な場に戻すか、・・・」80P

賢治のことば「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を／われわれのものにできるか」 81P

「彼はやはり科学というものの本質において、いままでの科学を超えたあるものを求めていたのではないか。そういうふうに、思わざるを得ないのです。」 86P

「よりよく共に生きる」 92P

「さて、私が考えていたのは、ただ原子力がダメだとか、反対だとかいうだけでなく、本当にみんなが共に、安全に生きられるような科学や技術を作っていくことなのです。／私にとってこうした中で考えてきたことはエコロジーという言葉で、表現されるようになってきました。これは人間の生き方の基本を、人間がほかの生きものたちと共に生きる所に置く。・・・」 102-103P

科学する苦悩 110P 時間の流れを包含した共に生きる 120P 実験屋 129P

オロオロとナミダヲナガシを原点に科学をやっていく 149P

「雨ニモマケズ」の詩全体を自分の決意表明にしたい・・・ 149P

(「」は引用です。「」になっていないところはかなりわたしの解釈・読み込みが入っています。)

たわしの読書メモ・・・ブログ 187

・フィリップ・ピニャール／杉村昌昭訳『反資本主義宣言—フランス NPA の挑戦』柘植書房新社 2011

マスコミではほとんど取りあげられていませんが、今フランスで新しい流れの運動が出てきています。それが一部日本のマスコミにもとりあげられたのは、反資本主義新党 NPA の郵便局員ブザンスノが大統領選に立候補してかなりの得票を獲得したという話です。

ヨーロッパではそして南米でもですが、オルターグローバリゼーションの運動がかなり広がりを見せています。その動きと連動するような反資本主義をかかげた運動が起きているようです。

今回、この本を読んで知ったのは、この NPA は LCR というトロッキーの流れをくむグループから出てきたということです。ところが、トロッキーにもいろんな側面があって、ボリシェビキに合流する以前のボリシェビキを批判していた「大衆の革命性に依拠する」トロッキーとレーニンと合流する中で、前衛党論として現れるレーニン主義的なところにとらわれたトロッキーです。後者の極はクロンシュタットの反乱を弾圧したということに現れています。NPA はトロッキーの影響を受けつつ、レーニン主義的なところのトロッキーを批判したところで、新しい試みの党を作ったようなのです。

革命家—反資本主義者—アクティビストという類比が出てきます。このあたり、なかなか読み込み切れないのですが、かつて言われていた、党—統一戦線—共同戦線ということと対比しうるのですが、NPA はこの図式に当てはまりません。統一戦線的なところで党を形成し、革命家集団をフラクションとしても残さないとしたのです。

レーニンの前衛党論は「大衆」を教育するなり指導するという、差別的なところで「大衆」をとらえています。むしろアクティビストが自らの課題である反差別を闘うひとつの方

が革命家よりも、差別の問題を押さえています。前衛は実は後衛であるということが反差別を闘うひとの間で広まっている考えです。

この本を読んでいると、そういうとらえ方が出てきていますし、組織の作り方に反差別の思想ということが押さえられています。

さて、どうもこれはデューイらのプラグマティズムとレーニン主義を批判したトロツキー派、すなわちマルクスに戻ったところで、マルクスとプラグマティズムの結合というべきことではないかと押さえられます。

プラグマティズムもヘーゲルの絶対精神の自己展開なり、法則の絶対化などを批判というところで、ヘーゲルを批判していたマルクスと結びつきます。実際マルクスの共産主義の定義の中にそのことは端的に表れています。「共産主義というのは、僕らにとって、創出されるべき一つの状態、それに則って現実が正されるべき一つの理想ではない。僕らが共産主義と呼ぶのは、現実の状態を止揚する現実的な運動だ。この運動の諸条件は今日現存する前提から生じる」(マルクス/エンゲルス著廣松渉編訳小林昌人補訳『新編集集版 ドイツ・イデオロギー』岩波文庫 2002 71P 廣松編訳は二人の間のやりとりを記録しているので、もっと煩雑な文になっています。この文は校正最終稿です。)

法則というものを設定し、そこから実践を導こうということ、ヘーゲル的な弁証法へのとらわれへの批判を、その批判をしているマルクスにさかのぼって、批判するという姿勢です。

マルクスの前述したドイツ・イデオロギーの中のテーゼの「現実の矛盾に対する闘争」という内容で、アクティビストや反資本主義者の闘いが在るのだと言い得ます。

わたしも、繰り返しこのテーゼをとりあげています。ただ、単なる自己表現活動として運動があるわけではなく、解決すべき問題への闘争で、現実の矛盾ということをどうとらえるのかということで運動の方向性があり、現実の矛盾の分析という理論の必要ができます。単にその問題だけを解決しようとしても、ちゃんとした解決にはならないし、そもそも力を生みません。また、そのことは得てして理論的なとらえ返しを抜きにした現実主義的实践に陥ってしまう恐れがあるのです。それがプラグマティズム批判につながっていきます。

この本の主題は反資本主義ですが、わたしは反資本主義よりもっと広い反差別ということで置き換えてとらえています。

わたしの反差別論の地平でいえば、差別は単に差別意識の問題ではなく、「差別の構造」といわれるところからとらえ返していかなければ、各差別の戦線で分断され、また反差別ということの運動、ひいては個別課題の運動自体が成立しなくなります。

そう言う意味で、プラグマティズム批判も織り込んで、この運動を押さえ直す必要を感じています。

早晚この運動は新しい総括を織り込んで再度新しい展開に入っていくのではとわたしは考えています。ともかく、これまでの運動の総括・批判の上に立った新しい試みです。それは日本にも波及してきているよう、わたしもその議論に参加していきたいと思っています。

・『現代思想 2011 年 12 月号 特集=危機の大学』青土社 2011

野家啓一「大学と科学者の社会的責任」

最首悟「マイナスとゼロ」

野家さんの論文を読んでいると、大学の法人化の中で、文字通り産学共同が進められ基礎学習部門が解体されていく現状が押さえられます。「社会性」は必要としても、なにか違うのです。これも一種のグローバリゼーションなのでしょう。

最首さんの文をこれまで論文として読み込もうとしていたのですが、むしろ科学性をもつたエッセーとして読んでいくことではないかと、ふと思っていました。

・佐々木力「ベーコン主義自然哲学の黄昏」(『思想 2011 年 11 月号』岩波書店 2011 所収)

佐々木さんは廣松さんの東大の科学哲学の講座を受け継いだひとで、廣松さんの影響も受けていて、以前から何冊かの本を読んでいます。書店で、毎月チェックしている雑誌のひとつ『思想』に、この著者のフクシマ原発震災へコメントがあるのを見てこれだけでも読みたいと買い求めました。

著者は東北大学で数学を専攻し、そこから科学哲学に入り込んだひとです。学生時代に同じ東北大だった(何回か前のブログで読書メモを書いた)小出さんと同じように女川原発の反対闘争にも取り組んだ経験があり、まさに今回 3.11 フクシマの原発震災の中で、心揺るがされる中で書かれた論攷です。

それは次の言葉に端的に表れています。

「十五年間も続いた「アジア・太平洋戦争」後の世界にとって、ヒロシマとナガサキは巨大な意味をもった。今度は、フクシマが二十一世紀の科学技術文明の在り方に深刻な問題を投げかけていると思う。」 119-120P

さて、この論攷の表題で、なぜベーコンが出て来るのかというと、ベーコンは自然の支配や征服というような世界観の元祖とでもいふべきひとなのです。科学哲学を専攻してきた立場で、ベーコンからさかのぼって自然観・自然哲学を問題にしている論攷なのです。

ベーコンに関する筆者のコメントを引用します。

「ベーコンは。アリストテレスに代わる近代西欧の思想家としてみなされるようになってゆく」 123P 「近代自然科学は、アリストテレスの論理学を超えて構築された。ベーコンがその主要な唱道者であった。」 130P

「ベーコンの新哲学の意義は、まず、認識関心の対象を、ソクラテス以前のギリシャ哲学者のと同じく、自然哲学に移動させ、さらに、思考の道具として、アリストテレス以来の論証法ではなく、普遍的自然法則の定式化をめざす批判的帰納法を彫琢したことであった。」 126P それは「テクノロジー科学」と私が名づけたエンジニア的科学的科学概念」 132P・・実験哲学・科学としてのベーコンの展開を示しています。

さて、このあたりはわたしが『通信』の28号で書いた「反差別コミュニズム論序説の序」の問題意識ともつながるのですが、著者はマルクスからトロッキーあたりの研究もしているひとで、帝国主義論としてリンクしていきます。そのあたりは筆者が引用している次のベイコンの言に表れています。ちょっと長くなりますが転載します。「人間の野心の三種の種類と、いわばその段階を区別することも的外れではないであろう。その第一は、自分の勢力を祖国ののうちに伸ばそうと欲する人々の野心であって、そのようなものは卑属で下等である。第二は、祖国の権力と人類の間に拡げようと努める人々の野心であって、そのようなものは品位はまさっているが、食欲点では変わりはない。ところが、人類全体の権力と支配権を宇宙全体に対して建て直しを拡げようとする努力する人があるなら、そのような野心（それを野心と言ってよいなら）は、他のものよりは健全で高貴なものであることは疑いない。ところで、事物〔自然界〕への人間の支配権は、ただ技術と学問にのみによっている。自然は服従することによってでなければ、支配されないからである。」129-130P 要するに「事物への人間の支配権」は別様に「自然界に対する人間の帝国」とも訳すことができる」130P という展開です。

これは、ベイコンが出てきた時代背景としての次の押さえともリンクしています。「ベイコンは、十七世紀初頭にあつて英国が地理的に拡大するだけでなく、英国が地理的に拡大膨張するだけでなく、自然の深奥にまで人間の支配権及ぼそうとした学問—政治思想を唱道した思想家であつた。」133P そしてバイエルソンの「科学帝国主義」という概念を紹介しています。135P

そして著者は「帝国主義論」の押さえに入ります。まずは、マルクスの科学ということが資本主義の中にどう位置するのかの展開です。そこにマルクス自体は展開しなかった帝国主義論にもつながるコメントがあるのです。「すべての科学が資本に奉仕するところにされる。[・・・] 発明がひとつの商売となり、また直接的生産への科学の応用それ自体が、科学にとって規定的な、またこれに刺激を与える視点となる。」140P そして「帝国主義論」でレーニン、ローザ、トロッキー、マンデルと展開します。実際文は前後していますが、マンデルの文「テクノロジーの全能さに対する信仰こそ、後期資本主義に特異なブルジョワ・イデオロギーの形態なのである」139P を紹介しています。

それは「自然に敵対する帝国主義」141P「古典的帝国主義期にあつては収奪の対象は、主として植民地・半植民地の被抑圧人民であつた。今や自然生態系が先端科学技術で武装した先進資本主義諸国による収奪と破壊の対象になっている。」142P という展開で、自然哲学やエコロジー・原発問題につながっているのです。

そして原子核エネルギーに問題に戻って、「その（原子核物理学・・・引用者）学問的特性は、「不自然」というよりは、むしろ「反自然的」な作為的なのである。そこにこそ、今日の原子力テクノロジーの抱えた最重要の学問的特性があるのである。」136P

著者のいた東大は原子力村の牙城で、筆者が反原発的なコメントをするたびに圧力をかけられたということを紹介してくれています。まさに国策としての原発推進・維持だったということなのです。そして、原発関係の資料をいろいろ上げてくれています。

要するに、著者は、ベイコンには「人間に損害を与えかねない機械技師の所業を「ダイダロス」の故事を参照することによって指弾し、抑止を示唆した」147P のに、そのような

ことさえないウルトラ・ベイクンの科学としての原子力テクノロジー、核科学という押さえ方をしている、そこでのベイクンの位置づけと批判なのです。そして、無限の仮説としての科学論 153P や著者の師のクーンのパラダイム論にふれながら、エコロジ的な東アジアの自然観などにコメントしています。このあたりは廣松さんが東洋思想に流目していたことにもリンクしています。

そして筆者の環境社会主義というような提起でその論攷をまとめています。

「脱原子力の新しい時代を先導する旗幟こそ、二十一世紀においては環境社会主義の旗とそれに随伴した自然哲学でなければならない。その際に、十七世紀初頭、政治思想的に、そして自然哲学的に、根源的に試作したフランシス・ベーコンの自然哲学が今や黄昏も迎え、転換を要請していること、そしてその遺産のよきものを継承した、新しい自然哲学が必須になってきていることを認識することが肝要なのである。」 157P

社会主義という概念自体の検証も必要ですが、コミュニズム論から、反差別ということから自然ということをとらえていく作業がいまこそ必要となっていると思うのです。

たわしの読書メモ・・ブログ 190

・高木仁三郎『高木仁三郎著作集第7巻 市民科学者として生きる I』七つ森書館 2002

高木さんの本で絶版になっている本が多く、古本で探しても、フクシマ原発震災以降あつという間に、売れてしまいました。いくつか買い求め、復刊されたものもあったのですが、初期の頃の本で手に入らない本がありました。ちょうど、その探していた本が、著作集の7巻に集中していたので、買い求めました。相当の厚手の本、所収されている論攷に少しずつメモを残していきます。

実験化学者として出発した著者の立場から実践ということの大切さを学び、そして何よりも、わたしのなかにあったマルクスの発達史・進歩史観批判の核心のようなことがエコロジーとむすびついていることが明らかになりました。わたしの中で一つの転換点になるような本です。

「科学は変わる」

これは初期の頃の作品で、この作品の中に後に詳しく展開されるいろんなことが萌芽的に織り込まれています。巨大科学・テクノロジー批判、地産地消、市民の科学という内容の展開です。

A T (いくつかの語の略語になっているのですが、主にオルタナティブ・テクノロジーの略語) というポジティブな突き出しもあります。

いつものように印象に残ったところを記しておきます。

担子菌の「改良」をしようとして松を枯らすことになったという事例 39P

「原子炉の重大事故はめったに起こらない」というのは、結論でなく、いわば出発点だった」 64P・・・そういうことにして出発したという意味。

「自然現象に制約されることのないエネルギー」の虚構 73P

原爆製造に携わった科学者の叫びの引用 80P

「科学者なんか一列に並べて銃殺してしまえという連中を、非難するわけにはいかない気がする。・・・」

巨大科学においては実証の方法を科学は駆使できなくなる 96P

エネルギーに関するパラダイムの変換に関する 5冊の本の紹介 101P

知的努力の好ましい方向付け 119P

不平等を減らすこと 抑圧を減らすこと 自然と人間の関係の総合化 実践を媒介とした知の相対化

ムラサキツクサのおしべが放射能汚染で、おしべの毛の色が青からピンクに変わるといふ生活的実践的観測の話 130P

知の在り方、方向付け

「知は実践と分ち難く結びついています。実践に照らして知の確からしさを検証し、絶対的なものとして知がひとり歩きすることを防いでいく、そのような知のあり方が可能になっていくためには、人々が共通の実践に立ちうることを、言いかえれば、差別や抑圧のない人と人の関係が絶対的な条件となります。人と人の関係において、支配—被支配という関係が徐々にせよ克服され、商品を通じての人と人の結びつきという関係が、より人間的な交流へと深化していくとき、そのときにのみ、私たちの自然に対する共通認識も深まりうると考えられます。そのような知のあり方を好ましいと考え、その方向に「科学」も方向づけていくべきだというのが私の考える方向づけです。」

131-132P・・・高木さんの反差別的科学論の神髄・・・「フェイルバッハに関するテーゼ」

(「これまでの唯物論・・・」「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したにすぎない・・・」)

との結びつき

運動のありかた

「(ベトナム反戦の“正義の闘い”が) 正義を実現するために、最大限に有効な運動の組織化が求められました。その結果、運動が機能的になり、力が強い、文章が達者だ、演説がうまい……等々、何らかの有能性にフルに頼った役割分担ができ上がり、そのような有能さを発揮できない人は追従していただけという運動構造ができ上がりました。本来、反戦平和の運動が目指しているはずの差別や抑圧のない理念とは、まったく相反した運動の構造ができ上がったわけですが、・・・そのような歪みが、運動に参加した多くの人々を落胆させました。・・・ベトナム停戦より前に、運動は急速にしぼんでいったと・・・」 138P 高木さんが引用した文です。・・・運動自体がどのような関係を求めているのかという目的を体現しつつ、その運動の現在性の中に関係性のあり方を示している・・・イズム論

「従来の運動がある一つの情勢認識やそれに伴う闘争課題をあらかじめ打ち出し、それに従って最も有効なように運動を設定していくものであったのと対照的に、この運動は、人々の生活の抱える問題から出発して、運動を進める中で共通認識を深め、それに従って共同の行動をしていこうとしていることです。つまり、路線の絶対的正しさや“正義”の度合いが、運動の強さ、力になっているのではなく、人々の共通認識の深さが共同の行動への原動力となっていくということです。」 139P・・・反差別とい

うところでの共通認識の形成というところからのエコロジー論、そしてすべての運動論

市民の科学のはじまり

「(専門性をもった権威者に頼ろうとする傾向があったし、あるけれど、・・引用者)権威者は、専門性という利害関係をひきずっており、その発想は、市民・住民の発想とは大幅に異なります。科学や技術のそもそものあり方をめぐって、問われるはずの問題が、専門家同士の代理戦争となり、いつしかすでに述べたような問題設定→パズル解きの文脈の中に解消されてしまいます。／そのような経験を経ながら、最近では、市民・住民運動は、認識の主体を自分たちととらえて、そこに既存の専門性を取り込んでいく、という方向に踏み出しているように思えます。」 141P

A T

A Tの二つの意味・適正技術(アプロプリエイト・テクノロジー)、もうひとつの技術(オルタナティブ・テクノロジー)

先進国における物質文明の批判といわゆる第三世界の自立的経済発展をめざすというふたつの流れ 146P・・・オルター・グローバル・ゼーションの内容をもつオルタナティブ・テクノロジー (A T)

A T論の詳しい展開があります。これが後の高木さんの科学のあり方論の原型を示しています。詳しく書きたいのですが、長くなるので割愛、後で高木さんの科学論とリンクさせて改めて対話したいのですが、とりあえず割愛します。

科学や技術だけの問題ではない、むしろ生き方、関係のあり方総体の問題

「[科学]や「知」や「技術」への志向が、ひとり科学や技術によって問題を解決できるという発想に転化しない限りにおいて、私はかかわっていきたいと思います。」

161-162P・・・高木さんの市民の科学者として出発点的決意表明的文

パラダイム論は廣松さんのパラダイムチェンジ論との対話の中で、もっと深化できるのではないかと考えています。

「いま、普段着の科学者として考えること」

高木さんの母校一東大での学生向けの2回にわたる講演の記録。

一回目は高木さんの科学者としての個人史的遍歴は別な本でも出て来るのですが、ここでより詳しい展開です。

二回目は、それに続いて、科学者としてのあり方、科学のあり方について話しています。「政治の論理だけでない、科学自身の中にやっぱり問題とすべき種がしかけられているのではないか」 202P という小見出しにもなっている問いかけがあります。政治主導の巨大科学・テクノロジー批判です。人間の側に科学技術を引き寄せる 215P という提起につながっていて、著者が作った人間—科学・技術—政治・経済のトライアングルの図 199P があり、人間に普段着、科学技術・テクノロジーに実験着・作業着、政治・経済に背広という対比させた展開があり 222P、この論攷の表題の「普段着」につながっているのです。

「危機の科学」

元々、「科学の危機」というところで書こうとしていたのが、チェルノブイリの事故を受けて、危機感の中で、「危機の科学」となったという論攷です。これは巻末の西尾さんの「解題」の中に書かれています。

これは高木さんの巨大科学・テクノロジー批判の端緒とでもいうべき記念碑的論攷です。

「1章 70年代の宇宙科学」「2章 70年代の原子力」で巨大科学・巨大技術を取りあげています。「3章 見えはじめた分岐」で巨大技術に対する適正技術としてATが分岐してきていること。「4章 危機の科学」はタイトルの本題。「5章 批判から変革へ」で、巨大科学への批判と未来のあり方を展開しています。

書かれていることで印象に残ったことをメモとして残しておきます。

原子力をはじめとする巨大科学は聖書のなかにあるバベルの塔的なこととしてあると冒頭に出てきます。229P

そして、三者（人間—科学・技術—政治・経済）の対話不能さの現実を書いています。236P

「国家科学」として巨大科学が現れているという指摘。238P

最初に数字があった・・・何パーセントを原子力でまかなうかという設定 261P・・・巨大科学が立ち現れてくる時の流儀

コンピューターでの机上の想定していく実証性のない巨大科学 266P

環境工学、生態学の危うさ 287P・・・環境工学と名付けて細分化された専門家を寄せ集め、それらを総合化してとらえる観点がない。問題を一気にグローバルなものに還元することによって、個々の汚染に関係した企業の責任や科学技術のあり方を問わない一部の生態学者。

ソフト（エネルギー）・パス 288P・・・「異質な最終用途（エネルギーを用いてわれわれがおこなおうとする多くの異なる仕事）を、各々の仕事にもっとも効率的なやり方で供給された最小のエネルギーで満たすか」という発想から出発し、「より効率的なエネルギーの使い方と適当な再生可能エネルギーに頼るやり方」

国家プロジェクトとしての推進 319P

教育—技術立国・愛国心ということでの突きだし

軍事技術と結びつく傾向

支配原理の異なる2つの世界（科学・化学の世界と自然的・生物的世界）の境界に様々な矛盾を経験 344P

遺伝子工学 核 スペースシャトル

人間の側の論理や感性の優位を回復しなければならない 344P

科学の中立論と科学者の社会的責任論の崩壊 345P・・・国家が科学者軽視していた時代には有効だったが、国家が科学を国家プロジェクトとして推進していく時代には機能しない、むしろ巨大科学批判として展開する必要

巨大科学と国家プロジェクトへの人間の立場からの批判 346P

トリレンマ・・・三極（人間—科学・技術—政治・経済）への分離 347P

矛盾を積極的に背負い込む中での市民の科学・・・根拠地作り 348P

ソフトな社会とハードな社会 349P・・・自然破壊的でテクノラート管理社会ーハードな社会とそれに対するアンチテーゼとして出てきたソフトな社会。

「統一性をもった体系」 354P・・・「自然と人間の関係に関わるもの」と「人間と人間の関係、科学技術の社会的あり方に関わるもの」という二つのカテゴリーが両立し得るような「統一性をもった体系」

「私は“ソフトな社会”の青写真を描くことに性急であるよりも、現在社会の批判的とらえなおしこそが“ソフトな社会”の展望を豊かにに思う。」 355P・・・共生とド・イデ（理念や理想を求めるのではない、現実の矛盾に対する闘争）

本書の問題意識

「問題をなるべく生の形で、いわば進行する流れのなかでとらえ、評価し、状況に切り込んでいく」 357P

「「暗い予感」が現実のひとつひとつ現実化し、「危機の科学」が一層浸透していくと感じさせるような出来事が、これからも次々と起こっていくことだろう。」 358P・・・予感は原発震災として現実化した。

「わが内なるエコロジー」

これはエッセイ風の文で高木さんのエコロジーへの思いと実践を書いています。

「科学は変わる」と「いま、自然をどうとらえるか」と自然観でつながっているのではないかと感じています。高木さんのそこでの代表作のひとつとして記せるのではないかと考えています。まだ高木さんの論攷の全体像もとらえかえせていないのですが、そのとらえ返しの作業の途中で、自然観三部作と密かに押さえています。

三部構成になっています。「第一部 二つの自然像」は著者の中にもあり、引き裂かれてある二つの自然像、「第二部 科学知の変革」は科学者でもあった宮沢賢治との著者の対話と哲学者の花崎さんとの対談です。「第三部 生活の変革ー「実験としての生活」」は、実験科学者から出発し「市民の科学者」を標榜するようになる著者が「生活の実験」というところでのエコロジー的实践を記しています。

この論攷を読んでいると、このひとは共同体論的なことも含めてエコロジー的なことを実践にも踏み込もうとしたのだということを押さえられます。わたしはエコロジーはまさに机上の論としての域を出ないのですが、高木さんはまさに実践的にも踏み込もうとしていて、そして単にエコロジーということだけでなく、ということよりも、エコロジーということの中に含まれる、ひととひとの関係のあり方と、ということも含めたエコロジー的な実践の試行もあったのだということが、このエッセイ的な文の中で示されています。

ここでも、書かれていることで印象に残ったことをメモとして残しておきます。

二つの自然その中での揺れ動きに身を任せる 402P

著者にとって自然は科学の対象としての自然と身近な自分の生活の中でいきる糧・条件としての自然に引き裂かれるということがあったのです。市民の科学者として、そのことの「統一」への道を歩もうとしたのでは。

「自分たちのもの」ではなく 403P

「(海は) 子や孫や、魚を食べるすべての人たちのもの」 402P

「直接のやりとりとしての自然と社会を媒介にした自然」 404P

観念的な共生を、宮澤賢治と旅から実感としてつかむ 405P

旅・・・ 生き方そのものが思想という人たちとの出会い 406P

自然への回帰ではない、一歩進めるもの 406P

民衆の歴史 生活者の地平

実人生がその一環であるようなあり方においてしか、賢治にとっての科学は存在しえなかった。 430P

レゾナンスとコンゾナンス 443-444P

共鳴・・・レゾナンス、協和・・・コンゾナンス、著者は全く同一性のものとしての共鳴ではなく、多様性の中での協和ということでの運動論を考えているのです。

「雪中炭」と「錦上花」 458P

「毛沢東が『文芸講話』の中で、文芸における普及と向上を論じて、「雪中炭を送る」こと、つまり大衆のもっとも切実な要求に奉仕する態度と、「錦上花を添える」こと、つまり芸術としての向上を第一に考える態度を対比させてみせています。それをわたしは「雪中炭」型と「錦上花」型とに類型化してみたんです。」・・・科学も専門化としての道をひた走る「錦上花」型に対して、著者は「雪中炭」型の立場から批判していません。

「やはり問題の核心は技術の問題としてあるのではなく、人間相互の関係のあり方と、人間の自然に対する向き方の問題としてあるのだということが、私（たち）の問題意識である。共同の作業にあたる人々の関係の質、共同性の深さに応じてこそ、ひとつの技術は、真に民衆のものとして機能しようと、多少の経験も踏まえて考えるからである。」 503P

「反原発・エコロジーについて」

講演録で、エコロジー論をきちんと展開しています。

「Ⅰ エコロジーは何だろうか」と「Ⅱ エコロジー思想の成立」でエコロジー論、「Ⅲ エコロジズムの批判的検討—マルクス主義と対比させて」、「Ⅳ エコロジー運動のこれから—その批判的検討」と続きます。

わたしの問題意識で注目したのは、Ⅲでマルクス主義とエコロジーの関係にかなり突っ込んでコメントしていることです。

ただ、わたしは高木さんのマルクス主義のとらえかたが、どうも官許マルクス主義と批判されていることから抜け出せていないのではないかと考えています。

さて、わたしはそもそもマルクス主義とは何かということを考えています。よく、マルクスの影響を受けているひとで、「わたしはマルクス主義者ではない」という主張をしているひとに出会います。これにはわたしは二つのパターンがあると思っています。ひとつは、マルクスの理論を一部とりあげて自分の理論の中にとりいれているけれど、マルクスの理論には基本的に賛同し得ないという主張です。賛同し得ないというところの、よくある例としては、共産主義革命論です。これもいろんな細分化できるパターンがあって、革命の可能性はないと断言するひとから、それは困難だから、わたしはとりあえず、現在社会の

枠組みからことを論じていくのだ、というパターン。また、過去のマルクス主義者の引き起こした運動への反発、またマルクスなどの共鳴を口にする、学者として飯が食えなくなる、などなど、・・・。

もうひとつは、そもそもマルクス主義ということが教条化され、マルクスへの個人崇拜のようなことが起きていることへの批判です。わたしもこの立場なのですが、そもそも、ひとの名を冠した〇〇主義などということが個人崇拜生む、反差別というような立場に立つものは個人崇拜のようなことは受け入れられないので、個人の名を冠した、「マルクス主義」などという表現は受け入れられないという立場があります。そもそもマルクスが「わたしはマルクス主義者ではない」といったことにもそれはつながっています。

そしてマルクス主義ということでは、マルクス-レーニン主義という三重に教条化された（すなわちマルクス主義という教条化、レーニン主義という教条化、さらにマルクスとレーニンを一体化させる教条化）が主流のマルクス主義として君臨してきた歴史があります。

さて、そもそもマルクス主義を口にするひとは大方、マルクスの思想を曲解した上で、それを教条主義的にとらえている、いわゆる官許マルクス主義なり（これはコミンテルンを支配したロシアマルクス主義の官許マルクス主義という意味です）、主流のマルクス主義ということがマルクスの思想をきちんと発展的に継承し得なかったという問題があります。

たとえば、マルクスの労働価値説や、マルクス主義フェミニズムの家事は労働力生産再生産労働だという規定があります。これはあくまで、資本主義社会においては、労働が価値を生み出すかのような、家事が労働力の生産再生産活動のような物象化をもたらすということなのだ、これがマルクスがいわんとしたことだと、わたしは押さえています。そもそも『資本論』は物象化ということで貫かれている」という廣松派の指摘があるのですが、それを物象化としてとらえないで、マルクスを資本主義の単なる分析家、国民経済学の完成者としておさえるような錯誤が起きているのです。ですから、「マルクスの労働というとらえ方がおかしい」とかいう、高木さんの批判もそこから出て来るのです。マルクスの思想をちゃんと押さえていくと、マルクスは労働の廃棄を訴えているとなります。それは今村仁司さんのいえば、「労働から仕事への転換」ということになっていきます。

日本の「障害者」の間では、青い芝の「労働は悪だ」とか「介助を受けるとき腰を上げるのも労働だ」とか言う提起がありました。前者は労働の廃棄から仕事への転換ということでそのまま受け入れられ、後者は、それは労働ではなくて仕事という概念で押さえるということではないかと思えます。

だいぶ、読書メモということを踏み外してしまいました。

いつものように印象に残ったところを、メモとして残しておきます。

「核と自然という現代社会の直面する二つの大きな問題」 512P

「ドイツ語では「収奪」と「開発」は全く同じ言葉を使うのですが、これは一つの言葉に二つの意味があるというよりは、概念的に同じようなものと考えた方がいいと思います。」 516P

「人間と自然の対峙でなく、人間を生態系の中でとらえ返す。」 517P

「民衆のための」でなく、「民衆による」 519P

8つの課題（資源の問題／安全性—命の問題／巨大な都市ではだめという都市の問題／反戦の問題／人口の問題—第三世界の問題／女性解放の問題／「自由」—反管理の問題）を出し、それを3つ（自然との共生、反戦、反差別・反管理）にまとめています。521-522P

運動形態・・・草の根主義と非暴力直接行動 522P

マルクスが労働を軸に立てているという批判 523P・・・マルクスは資本主義社会では労働を軸にたてられると批判しています・・・誤解

「マルクス主義では、生活は労働力の生産・再生産過程と位置付けられますから」526P・・・マルクスは資本主義社会では「生活は労働力の生産・再生産過程」という物象化が起きると言っているのです・・・高木さんのマルクスのとらえ返しへの疑問

エコロジーの「強み」と「弱さ」 527P 534P

「自分の身の回りの生活批判を通じて、」「生活領域の問題をひとつの総合的観点からとりあげ得たことによって、エコロジズムが新鮮な魅力をもった。」 527P

「例えば食品添加物とか洗剤とかいった問題から、もっと大きな構造—例えば第三世界の人々との関係—に迫るといのは、そう簡単なことではないでしょう。エコロジズムが一方において身の回り主義になったり、他方できわめて抽象的な自然愛好に陥ったりする弱さ多くもっていることを指摘しておかなくてはならないでしょう。」527P
ジグソーパズルのはめ絵の例で、マルクス主義は行く先の絵が見える、しかし、ひとつひとつのコマとコマがどう結びつき合っていくのかがなかなか見えない。エコロジーはコマとコマがこう合うという形で問題をたてなおした、しかし将来の社会像が見えない。534P・・・反差別というところでエコロジーとマルクス的な社会変革論というふたつのことを、そしてすべてのことをつなげていけるのではないか

多様性 536p

「弁証法というのは、二つの対立物の対立のダイナミズムを前提としています。運動論としては一つの主張への共鳴理論で、対立が止揚されて共鳴していくという感じですが。しかしエコロジズムは多様性に立脚していますから、単一主張での共鳴ではなく、多様な主張を認めあつたうえでの共同（協働）という方法論を育てなくては駄目です。」・・・多様性ということの中にある「違い」ということの意識の検証

「地球にとって大事なものは水と土なんだ」 536P・・・太陽も

自然主義批判 537P

「(総体的・「社会的」観点のない・・・引用者) 自然科学的自然観だけでは結局、自然モデルに人間を従属させる、自然の規範に人間を従わせるという“自然主義”にしかならず解放的ではありません。・・・(解放的な方向での議論の・・・引用者) そのひとつに、ラブロックの「ガイア理論」があります。これは、地上の生物の共生は、与えられた地物的条件に単に適合して生物が生きるということではなくて、生物が自己の生存の条件を主体的につくり出し、次第に豊かに成熟させていく、そういう協働作業だという考え方です。その意味で多様な生命の共生は、ひとつの文化を成熟させているという風に考えてもよい。」

「少数派の力を見なおす」

コワイということでは力にならない、理屈で理解しても運動には結びつかない、そこには共感というようなことが必要という主張をしています。

そして、少数というが力になる、少数ということを前提にして出発するという展開をしています。

また、共鳴ということよりも、多様性を認め合う、協和—ハーモニーという運動のあり方を提起しています。

そして、学問の方法を運動に（これは端的には自分を突き放してみる観点が必要とされることとして）、運動の方法を学問にという提起をしています。

「共著者の論文」

- ・「化学の危機から変革の科学へ 現代科学の問題としての原発」

いままでの科学の立て方を問題にしています。

わたしは自由競争ということで取り返しのつかないことをしていく、作り出して後から対処していくというやりかた、専門家の中で全体を見渡せないようになっていく、と要約していました。

高木さんは5つの項目で展開しています。生産性・創造性の喪失／観念性と虚構性／巨大になりすぎた科学技術／細分化に伴う退廃と大衆遊離／管理強化と差別抑圧の進行

- ・「風車・反原発・三里塚 運動に新しい風を」

津村喬さんの司会、前田俊彦さん、橋爪健郎さんとの高木さんの対談です。

地域で風車を作った橋爪さんと三里塚の運動をしていた前田さん、反原発の高木さんの組み合わせ、新しい地域に根ざした開かれた運動を語っています。少数な単位での小さい地域からの地域に根ざした運動を開かれた運動として展開していこうという試みを語っています。将来のコミュニティのありかたのようなことが垣間見えます。問題はそれが総合的なあり方として、どうつなげていけるのかということなのですが、。。

- ・「ソフトさとは何か ソフト・パスへの一視点」

ロビンソンのソフト・エネルギー・パスという論攷に対するコメントです。

ロビンソンは、社会のあり方ということとは切斷して、エネルギーのあり方を論じていて、それがソフト・エネルギー・パスという、再生可能な自然エネルギーへの転換の主張なのです。著者はそれはそれで評価するし、賛成するけど、人間の対自然・対社会の2つの関係は共軛的という主張で 629P、エネルギー（得る方法）だけの問題ではない、ソフトな太陽型の社会、ソフトな社会へのパスが必要、ソフトなパスの問題ではないという展開です。

「未公開資料」

いずれも『ぷろじえ』に掲載された原稿です。70年代初期の全共闘運動の影響を受けた科学論・科学者論です。本格的に本の出版をする以前の論攷です。科学論とて展開される基礎的な哲学的論攷もあり、そしてマルクスの流れへのコメントがとてもわたしの問題意

識では、刺激的であり参考になりました。

・「自然—人間—科学 試論」

その1 広重と渡部 その2 マルクス主義 その3 哲学総体

これは著者の哲学的な所への対話になっています。とりわけマルクス／エンゲルスへのコメントがわたしの中でこれまで考えていた、反差別論、進歩史観批判とリンクしました。この論攷は、もう一度読み直して、きちんと対話したいと思っています。学習会などで使える論攷ではないかとも思っています。

とりあえずメモを残して置きます。

対象化された<知>の地平の明るみにおいてのみ把握することのあやまり、主体的人間を自然と対峙させる外的な存在としてとらえることのアヤマリ、ということが書かれています。

未知の自然—知り得ないものがあるというところから出発する必要が書かれています。

進歩という概念のとらえ返しの必要性を展開しています。・・深化の概念からのとらえ返し

高木さんの思想を要約するような印象的な2つの文「自然と自分との関係性が当然自己に強いてくる全人間的な問いかけをはっきりさせたいのである。そのことの中に近代知の構造を変革し、近代科学における価値観の転換のための鋭角的な突破口を求めているのである。」「自然科学者が自然という対象に対して、原初感性的に抱くであろう意識に切り結ぶことができれば、即ち言葉を換えれば、自己と自然との関係をそこまで普遍化することができれば、個別科学者をしてその個別科学の現場感覚から人間としての現場感覚に立ち戻らせ得ることができるであろう。」 646P

科学の私有性 652P

マルクスの対話からする私有性批判 エンゲルス 640P その2の冒頭マルクスの引用などマルクス／エンゲルスの思想の検証として重要なコメントも出ています。

自然との交流—相互関係こそが人間性の証し 658P

(自然) 科学における展望は、私有性を否定することの中にある 662P

マルクスが哲学から入ったように高木さんにも、初期に哲学的なところからとらえかえそうという指向があったことがとらえられます。・・・自然との交流を出発点にするというところからの世界観と哲学

・「折原書簡を読んで」

折原さんは教育学園闘争の中で授業の正常化を拒否して処分された教員です。その事へのコメント、高木さんは、むしろ中にいるところでの模索というみちがあったのではないかと、一応大学に残ったひとですが、何年か後に結局大学を辞めています。それこそ、当時科学をやっていたひとのいろんな選択があったのですが、高木さんは出版したものではありません、あまり、教育学園闘争にふれていなくて、当時の時代状況の中でどうしていたのかがとらえられなかったのですが、やはり、教育学園闘争から多大な影響をうけていたのだということが、この文の中でとらえられました。

・「討論 I—梅林氏への手紙」

エンゲルスからスターリンにつながる自然弁証法の基底性、自然史的歴史的必然性というのは、マルクスまでさかのぼれるという高木さんのとらえ返しです。それは生産力の発達と生産関係の矛盾が革命の力になるというとらえ方自体に問題があったという指摘です。生産力の発達というところでの進歩史観があるのです。それは科学の発達というところにバラ色の夢を抱いたということともつながっていきます。むしろ、科学が何をもたらしたかの批判もでています。そのあたりは、無限の経済発達という観念や、科学の無限の発達という観念自体に問題があるとも言えます。

廣松さんの文へのコメントも書かれています 690P・生産力と生産関係の矛盾というところからの革命という押さえ方への批判です。・・・生産力の発達というところに展望を見いだす、マルクスの進歩史観・発達史観への批判ということなのでしょう。

自然と対峙しつつ、自然であり続ける人間の弁証法—こそが、実証性の地平を越えた唯物弁証法として求められている 690P

自然としての人間と自然と対峙する人間という中にあるがままの人間とみる。この永続的止揚の実践こそが人間の全体的過程（「全体化」という語に違和感、「歴史的行動」という意味？）

知と不知の弁証法 知の構造変革をその枠組みでとらえる 692P

マルクスの限界 699P

「解説」・・・高木さんと何回か対談してかなり共鳴していた哲学者の花崎さんの解説です。花崎さんの対話の続きのような解説です。

よくまとまっていて、わたしのメモなどよりも、これを読んでと言いたい内容です。

ただ、マルクスとの対話では、わたしにとって疑問を感じる事が書かれています。

「解題」・・・高木さんが立ち上げた原子力資料室の共同代表の西尾さんの文です。この巻に収められている論攷の背景のようなことを書いてくれています。著作集の各巻にも同じ「解題」があるようです。

「市民科学通信」

高木さんと関わっていた人たちの高木さんのひととなり伝わってくる思いでの記が小冊子として挟まれています。これは各巻に付録的についていて、同じタイトルで本になっています。

エコロジー関係の本を読むときは、なぜこんな自明なことが通じないのかという暗い気持ちになるのですが、高木さんの本を読むと、何かやすらぎのようなことを感じています。廣松さんの本も自分の居場所に帰ってきたというようなところがあるのですが、高木さんの本にもそんなところがあるのです。

さて、高木さんには反差別という立場性がはっきりしていて、そこでエコロジー論を展開しています。エコロジーの運動はときとして、他の問題と切り離して、エコロジーというところだけで閉じている事が多いのですが、このひとは開いているエコロジー論です。

このあたりは、階級闘争やプロレタリア革命論が反差別ということを欠いていることとかにもつながっていて、わたしは反差別というところで開いた運動が階級闘争やプロレタリア革命論、そしてエコロジーにも必要なのだと考えています。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 32 号」アップ(12/1/29)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリーを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされないう方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

(編集後記)

◆今回は「通信」の発刊の間を狭めました。しばらく、隔月か毎月かの間を揺れ動くことになりそうです。

◆もう少しコンパクトにして読みやすい物をと追求しています。しかし、巻頭言と高木さんの初期作品の入っている著作集 7 巻が、わたしの中でリンクしていたので、そこまで読書メモを載せたので、かなりなものになってしまいました。

◆巻頭言は、「通信」28 号の『「反障害原論」への補説的断章(9)』につながる「断章(10)」の位置づけもっています。一度にまとめた物を出せません。いつものように試行錯誤して、文を書き綴りながら論考をまとめていきたいと思っています。

◆読書メモ、エコロジーと原発震災関係の本への集中期間の続きの文です。高木さんの哲学的な論攷との対話をもう少しにつめたかったのですが、とりあえず先を急ぎました。どこかで、改めて、深化してみたいと思っています。

◆反一脱原発の運動は今、経産省前の「脱原発」テント闘いが、ひとつの焦点になっています。マスコミではほとんど取り上げられていません。駆けつけたいのですが、動けないでいます。次ページに朝日新聞の記事を貼り付けておきます。

◆石原都知事と大阪の維新の会あたりの連動の動きが出ています。教育や福祉の切り捨て、労働運動への抑圧というところでファシズムの芽的なことがあります。地方分権を主題にしている、そこでの地産地消で評価できるのかどうかという問題はあるのですが、市町村合併も進めるということもあり、どっちにしてもネオコン的なグローバルゼーションなり、ファシズム的な流れになっていくのではと押さえています。

◆「ケア労働」を巡って、フェミニズムと「障害者」運動の対立のようなことが出ていて、そのあたりを整理しながら、物象化批判フェミニズムという流れの形成が必要ではないかなどと考え始めています。できるだけ早く、そのあたりの論攷も出していきたいと思っています。



経産省前のテントの撤去命令に抗議する市民団体ら
 =27日午後5時39分、東京・霞が関、内田光撮影

「脱原発テント」に撤去期限
 市民団体は反発、設置を継続
 東京・霞が関の経済産業省の玄関前で、「脱原発」を掲げる市民団体が設置しているテントについて、経産省は27日午後5時までの撤去を命じたが、この

「脱原発を訴える」「経産省前テントひろば」がテントを張ったのは、昨年9月11日。「繰り返すな 放射能汚染」といったのぼりが掲げられ、テントが三つ。4、5人が寝泊まりしながら、ほかのメンバーとともに署名活動などを行っているという。

経産省は昨年9月、団体側から出された国有地の使用許可を却下。口頭で撤去を求めたものの、事実上テントを黙認してきた。しかし昨年末、テント脇の発電機から出火するほや騒ぎがあり、火気を使わないように求めたが改善されず、撤去命令に至ったという。

だが、団体側は「この時期に命令を出したのは原発再稼働への障害になると考えたからではないか。国が『原発はもう動かさないと』言わない限り、自主的には

退去しない」と話す。経産省は「管理規定上、問題がある」と訴えるが、今のところ強制撤去する法的な根拠はないという。

朝日新聞 2012.1.28 朝刊

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメンバーリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>